

モモ枯死症の発生抑制に向けて（第1報）

平成28年12月
山梨県果樹試験場

モモ枯死症の発生原因については調査中であるが、これまでの現地調査等で得られた知見を基に、枯死症の発生が多い6年生までの若木期の栽培管理について、考えられる範囲で当面の留意点を取りまとめたので参考にして頂きたい。なお、本資料は今後新たな知見が得られ次第随時見直す予定である。

○モモの枯死症とは

- ・ 樹齢6年生までの若木に発生が多い。
- ・ 春先に発芽はするが、新梢があまり伸長せずに枯れる。
- ・ 台木は健全でヒコバエの発生がみられる。



○発生樹・発生園の特徴(以下の症状が複数見られる園が多い)

枯死症樹とヒコバエの発生

- ・ 冬季剪定時の強剪定により、主幹部や主枝に太枝を切除した切り口が多数あり、その切り口から主幹部に枯れ込みが入っている。
- ・ 剪定した枝の基部が切り残され(通称：でべそ切り)、その切り口から主幹部にまで枯れ込みが入っている。
- ・ 主幹部に裂傷が発生している。
- ・ 傷口感染による胴枯病の発生が多い。
- ・ 過剰施肥等により枝が軟弱徒長している。
- ・ 苗木を植え替えても枯死を繰り返す場合がある。
- ・ 土壌pHの高い圃場が多い。



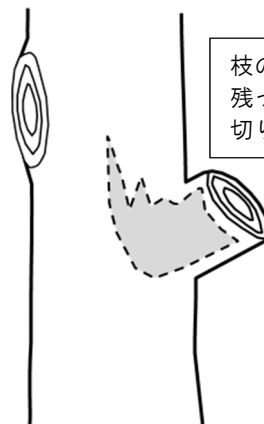
枯死症樹と主幹の傷

1 冬季剪定の留意点

- ・ 剪定の切り口からの枯れ込みを防止するため、6年生までの若木の剪定は厳寒期を過ぎた3月上旬以降に実施する。
- ・ 剪定時に枝の基部を切り残すとその部分がゆ合せず、枯れ込みが入ったり、胴枯病菌の侵入口になる恐れがあるため、枝の基部できれいに切る。

基部まできれいに切ると、カルス形成が盛んとなり、ゆ合が進みやすい

ゆ合剤を必ず塗布する！

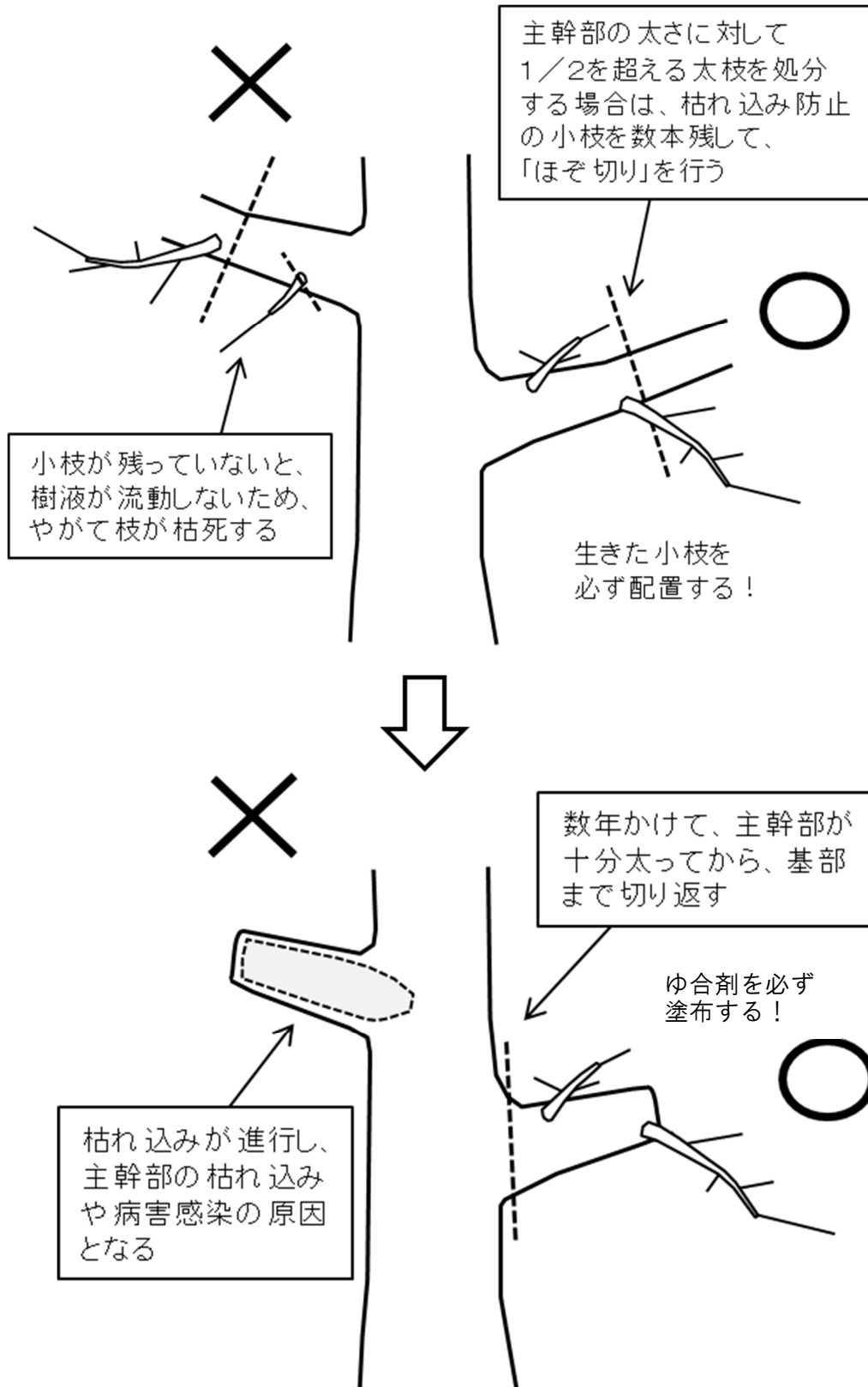


枝の基部の切り残すと、残った部分が枯れ込み、切り口のゆ合が進まない

枯れ込みの進行
胴枯病菌の侵入

枝の基部できれいに切る

- 切り口のゆ合を促進するため、剪定直後に十分量のゆ合剤を確実に塗布する（ゆ合剤：トップジンMペースト、バッチレート）。
- 主幹部から出ている太枝を処分する場合は、枯れ込み防止のため、葉芽のある小枝を数本残して「ほぞ切り」を行う。太いほぞだけを残すことはしない。



モモの太枝の切り方(模式図)

2 新梢管理及び秋季剪定の徹底

- ・ 冬季剪定時に大きな切り口を作らないようにするため、5月下旬～7月下旬の新梢の伸長が旺盛な時期に最低2回は新梢管理を実施する。特に主枝延長枝と競合する強い新梢、主枝や主幹の背面から発生している強い新梢、主幹基部から発生している強い新梢は、必ず芽かき、捻枝、摘心を実施する。
- ・ 生育が旺盛な樹の主枝競合枝や徒長枝に対しては、9月上中旬に秋季剪定を行う。秋季剪定で枝に葉を着けた状態で基部を長く残した場合は、3月以降の冬季剪定時に必ず基部まできれいに切り返す。

3 主幹部や主枝への傷発生防止

- ・ 主幹部や主枝等の太枝に傷口ができると、その部分から枯れ込みが入り、樹勢低下や胴枯病菌の侵入口となる恐れがある。
- ・ 主枝や主幹に支柱を添える場合は、枝に傷がつかないように慎重に行うとともに、結束箇所が食い込んでいないか随時確認を行う。
- ・ スプリンクラー散水は、樹に直接水が当たらないように水よけを設置する。
- ・ 刈り払い機等で傷つけたと思われる主幹部の傷も散見されるため、除草作業は樹に傷をつけないよう十分に注意する。

4 圃場衛生と病害対策

- ・ 枯死樹、切り株、園内に放置された剪定枝には胴枯病菌や木材腐朽菌（キノコ類）の感染が多く認められ、伝染源になることが懸念される。
- ・ 改植、新植する際は圃場衛生に努め、速やかに罹病樹を伐採・抜根し、残渣を適切に処分する。
- ・ 新梢管理、秋季剪定、冬季剪定時に発生した剪定枝や伐採樹の残渣は、園内に放置せず、速やかに処分する。

5 土壌管理による適正樹勢の維持

- ・ 土壌が硬くなると根域が広がらず乾燥や滞水の影響を受けやすくなり、樹勢の低下を起しやすいため、深耕を励行して土壌物理性の改善を図るとともに、必要に応じて排水対策を講じる。
- ・ 窒素の施用量は、土壌の種類や前作の施肥状況等で異なるので、施肥時は昨年伸びた新梢の長さなど生育量を観察して施肥量を調整し、過剰な施用を避ける。
- ・ 土壌酸度が高くなると適切な養分吸収が妨げられるので、土壌酸度はpH5.5～6.0を維持する。